

CIP 研修参加の思い出

社会福祉法人藤倉学園大島藤倉学園
 学園長 岩下よし子
 1996 年クリーブランド

「今年は腕試し、本命は来年」と理事長に言われ CIP 研修の面接を受けた私は、10 分でギブアップ。覚えて行ったはずの自分史が途中から真っ白になってしまったのでした。「ありがとうございます。また来年お目にかかりたいと思います」みたいなことを言ってにっこり笑って退去したのでした。ところが驚いたことに届いたものは 1996 年 CIP 研修参加の許可だったのです。もっとも条件には語学研修必須というのがありました。後に「ひとりには語学力でなくキャラクターで選んだ」と全社協の松寿（まつじゅ）さんに言われたような気がします。

ニューヨーク・オルバニーで 10 週間の語学研修を受けたのが、人生でもっとも勉強した期間です。けれど 10 週間でそれほど効果が上がるわけもなく、クリーブランドへ移ってから数々の失敗を重ねました。私の研修場所は知的障害者のトレーニングセンターとホスピス。ホスピスでは「明日フューヌラルホームへ連れて行く。」私の辞書のフューヌラルはナショナルフューヌラルしかありませんし、日々亡くなる人がいるホスピスです。「何着ていく？」「それでいい」「??？」と思いつつ黒い服を着ていくと連れて行かれた先はそう、勉強のために葬儀屋に連れて行ってくれたのでした。ランチ時になり「よし子、ミスター・ヒーローへ行って来て」「何号室の患者さん？」ドッと笑い声。患者さんではなくハンバーガー屋さんの名前でした。そんなことが度々でした。10 数国からの参加者の内、私の語学力が一番低く、「よし子のワークが終わったらランチ」とよく言われました。英語が話すのが面倒になって黙っていたら「よし子が変わった。ジャパソ

サイアティへ連絡しろ」といわれアメリカでたくましく暮らす日本人に会い日本食でのもてなしをも受けました。

さて、どちらもボディランゲージや声なき声、心と心で感じ取る職場です。折り紙・編み物・織物等ハンドクラフトなら何でも大好きな私はその技をフル活用、アメージング！といわれることに快感を覚えながら 4 か月の研修をまっとうしたのです。この技はホストファミリーでも私を救ってくれました。

日本の研修はすべてお膳立てされていますが、CIP 研修は火の中水の中、自分でかいくぐっていかねばなりません。おかげでサバイバル英語だっていいんだ、という変な度胸がつかしました。けれどもあれから早 14 年、この研修でアメリカと日本の架け橋になりたい、と志望動機を書きながら今私はすっかり英語が面倒になっています。

CIP 研修の本を出版しました

医療法人社団温知会理事 梶村慎吾
 1996 年クリーブランド

私は 1996 年から 97 年にかけて 4 か月間クリーブランドでの CIP 研修に参加し、ジュドソン・リタイアメント・コミュニティという総合高齢者施設において学びました。そのときジュドソンの高齢者に対する働きのすばらしさを感じ、日本に紹介できればいいなと考えていました。

2006 年にジュドソンの 100 年記念誌が送られて来ました。その中にジュドソンのハイレベルなサービスを支える哲学ともいべき考え方やそれに基づく活動が書かれており、100 年記念誌の内容も含めて日本にジュドソンの紹介をしたいと考えました。2007 年 7 月、クリーブランドで CIP の創立 50 周年を記念して CIP の世界会議が開かれ、私も参加しました。その機会にジュド

ソン・リタイアメント・コミュニティを再訪し、会長に会って研修当時すばらしい経験をさせていただいたことのお礼を述べました。同時にジュドソンの働きを日本に紹介したいと希望を述べたところ、全面的協力の約束をいただくことができました。その結果、このたび「人生を豊かに生きるために必要なものは何か 理想の高齢者施設を求めて—ジュドソン・リタイアメント・コミュニティに学ぶ—」（太陽出版）を日英対訳の形で出版いたしました。

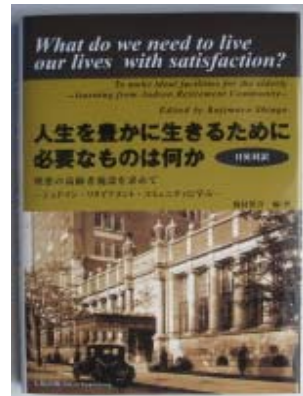
本の「あとがき」に次のように書きました。

「人々の寿命が延び、退職後の生活がますます長くなる時代にあって、後半生をいかに生きるかが時代の大きなテーマとなっている。私は 13 年前、アメリカの高齢者施設ジュドソン・リタイアメント・コミュニティで研修し学ぶ機会があった。そこでは人生の後半を充実して生きるために、健康を支える身体運動を行うこと、知的刺激を高めること、社会と密接に関わることの 3 つを重要な要素として利用者の支援を行っていた。そこで利用者の活発な生活、働く人々の意欲的な姿、近隣の人々との積極的な関わり等、生き生きとした姿を目の辺りにし、高齢者施設のありかたに大きな示唆を得た。このたび高齢者施設ジュドソン・リタイアメント・コミュニティの 100 年記念誌の内容の紹介をすることができてとても嬉しい。

私を研修にアメリカへ招いてくれたカウンスル・オブ・インターナショナル・プログラムズ USA(CIPUSA)という団体は、本文に書いたように現在まで 50 年以上にわたって世界 147 か国から 10,000 人以上の職業人をアメリカに招き、職業的能力向上と異文化交流を通じて国際理解を深める活動を行っている。この団体についても本書の第 3 部で紹介することができた。(以下略)」

『人生を豊かに生きるために必要なものは何か』

—CIP での心豊かな体験が語られています—



かねてより梶村さんがこの本の出版のために精魂を注いで来られたことは存じておりましたが、それが 1 冊の英和対訳書として成就されたことは、まことに喜ばしい限りです。ことに本書は梶村さんの CIP 体験そのものを

内容をなされていますので、CIF ジャパンと致しましても衷心よりお祝いを申し上げます。

CIF International の会長、Mimmo Merola さんからもお祝いのメールが届けられましたので、ここにご紹介いたします。(竹内記)

Dear Mr. Shingo Kajimura,

I have just recently received your book and I would like to compliment you on the initiative. It is truly a commendable endeavour.

I thank you for the complimentary copy, but most of all for writing about your CIP experience and including CIF. I firmly believe that our Organization can only benefit from such concrete and tangible projects that do in fact inform a wider share of the public of our mission.

I will personally make sure that the rest of the Community of CIF International learns about your book, as an asset to our quest, at the next Board of Directors Meeting in Hamburg this August, where I hope to possibly congratulate you face to face.

Thank you again, it is people like you that make our Organization so special.

Yours sincerely,

Mimmo Merola

President CIF International